

日本声楽発声学会

学会通信 第45号

2021年3月発行

会員の皆さまへ

会長 川上 勝功

学会通信第45号をお届けいたします。

皆さまは、この長いコロナ禍をどのようにお過ごしでしょうか？

世界的なパンデミックが、ヨーロッパやアメリカでは第3波となり、感染者は1国で1日10万人とも12万人ともTVニュースから流れてきます。この原稿を書いておりますのは、2020年の11月半ばですから、皆さまのお手元に届く頃には、世の中の様子はまた変わっているものと思われると思います。

全ての人々が望んでおられるように、私も状況が好転の方向に向かっている事を願うばかりです。ただ、つい先日の読売新聞掲載の記事によりますと、どうもワクチンが我々日本人の手に入るのは、来年(2021年)の6月頃になるのではないかと言う事です。日々、溜息の連続で過ごしております。

なぜなら、今年(2020年)に開催する事の出来なかった5月と11月の例会と夏季研修会が、果たして来年(2021年)には開催に漕ぎ着ける事が出来るのかどうか、今の時点ではどなたにも皆目見当が着かないと言うのが現状であります。

学会の理事会で話し合った計画では、来年5月30日(日)の例会及び総会につきましては、2021年の年明けにも会場となる芸大に借用が可能かどうかを問い合わせることになっております。もし借用の許可が出ましたら、3月末頃にその時の社会状況を見極めまして、GOサインなり、中止を決める事になっております。

準備はそれ迄に万全を期して整えておくつもりです。しかし、GOサインが出ていても、やはり直前になって、その時の状況の変化により、少し

でも危険と感じたら、即中止と言う事にさせていただくつもりにしております。大変残念ですが…。

今は、どなたかが仰っておりましたが、あたかも地球の自転が速まったかの如く、時間が急速に過ぎ去り、1週間がまるで1日のように感じられる……。私自身、そのまま実感しております。

前置きが長過ぎてしまいましたが、今、私が一番重く受け止めて考えておりますのは、元会長の米山先生から受け取ってございました「教育部会」の記録をどのような形で皆さまにお届けしたら良いかです。これは、米山先生が会長在任中に約10年掛りで行ってきた教育研究会の記録です。その膨大な資料(録音)を聞き取りして、前会長の永井先生が8ヶ月もの時間をかけて纏めて下さったものです。私個人の気持ちといたしましては、これから理事会で検討を進めていただきまして、行く行くは、「日本声楽発声学会」発行の冊子として、一般に向けても出版できたらとも希望を持っております。

次に、『声楽発声用語集』の第1刷が発行されてから約10年が過ぎました。内容をもう一度検討し直し、新たに発行する事を決めました。これから理事一同で鋭意再編集に取り組み、いずれ出版できるようにしたいと考えております。立派なものが出来上がるものと期待をしております。

そしてもうひとつ。会員の皆さまの何人かの方々から名簿作成の依頼がございました。これは個人情報に対するセキュリティーの問題が発生すると言う事で、やはり10年ばかりの間、会員の皆様にはお配りしておりませんでした。現在は、原本は事務局に保管しておりますし、3名の現執行部も一部ずつ所持しております。今のところ他の理事の先生方にはお渡ししていません。

ただ、一部の会員の方から、「どのような方がおられて、その方がどのような職業に属しておられ

るのかも分からないのは大変不便であるし、会員同士の相互交流にも支障を来す。」とのご指摘が寄せられました。つい先日開かれましたオンライン理事会で、いろいろ検討する事になり、確かなものを作成して、皆さまにお届けしたいと思いません。その目的もございまして、年が明けましたら皆さまから、改めてご住所等の情報収集を行いたいと思いますので、どうぞご協力の程、よろしくお願い申し上げます。

最後になりますが、これまで副理事長及び事務局長の職を、際立った仕事ぶりで一生懸命努めて下さいました豊田喜代美理事が事情によりまして、ご退任なさる事になりました。しかし、引き続き理事として、また「演奏部門委員長」としては、今後ともお力添えして下さいます。豊田先生は、私個人への補佐と共に、学会の運営に対しましても多くの業績を残して下さいました。心から感謝し、お礼を申し上げます。後任につきましては、これが発行される頃には決まっている事になりますが、取り敢えず今年いっぱい両方の職を全うしていただき、その後、後任が決まるまでは、私、川上が引き受けることといたしました。改めて豊田先生、ご苦労様でした。この誌面をもちまして、理事一同からも心から御礼申し上げます。

前にもお伝えしました、オンラインでの勉強会は、皆さまからの受信可能なメールアドレスを住所等の情報と共にお知らせいただきましたら、早速配信の準備にかかる予定であります。

一日も早く皆さまと共に笑顔で例会に集う事が出来ますように、ご一緒にお祈りいたしましょう。お元気でお過ごし下さい！！

◇ 西浦 美佐子 理事. 西浦耳鼻咽喉科院長
沖縄県立芸術大学音声生理学講師

『米山文明先生を偲んで
～鹿児島県耳鼻咽喉科医会総会臨床懇話会の内容を振り返って～』

平成 25 年 4 月 6 日（土）鹿児島県耳鼻咽喉科医会総会臨床懇話会（城山観光ホテル）で米山文明先生に講演をいただいたことがあります。

「音声障害を診察するとき、その評価はかなり難しく、医師側の聴覚、経験も必要」と仰り、日本語で歌う外国の数人の歌手のカセットテープをお聞かせになるところから始まりました。以下、講演内容より。

「中国のソプラノ歌手が歌う滝廉太郎の『花』の演奏は、子音、母音とも高音でも明るく効率的に響かせています。共鳴の使い方は言語を覚える段階からの習慣でしょうけれども、中国語で使う場合の共鳴の使い方を日本語に置き換えているという印象を受けました。フランスのシャンソン歌手イヴェット・ジロー、アメリカのキャサリン・バートルは日本人が歌う日本語よりもきれいです。外国の歌手は、恐らくローマ字を見て練習しています。日本語は子音と母音がワンセットになって一括した音になっていますから子音の音が明瞭に出ていません。例えば、Caro mio ben のレッスンで、日本人の学生が日本流に子音と母音を一括して歌うと K とか S とか T の子音が聞こえず外国の歌の先生は納得しません。」という話などされました。

次に、声区について、「日本では地声・裏声、ヨーロッパでは胸声区・中声区・頭声区、アメリカでは軽い声区・重い声区と国によってばらばらに定義しています。声帯を厚く使う、薄く使うといっても実際にどんな声かピントこないでしょうけれど、聞いていただければわかると思いますから。」と仰り、厚い声「♪～」、薄い声「♪～」、声のサンプルをいくつもお聞かせになりました。クラシック、津軽民謡のホーハイ節、アルプス地方のヨーデル、モンゴルのホーミーなど色々な歌のジャンルの地声と裏声、また、名歌手の喉頭所見などをビデオ提示されました。

当時の NHK 人気番組「ウルトラアイ」にご出演のビデオもお示しになり、「音圧にほとんど違いはないのに人間の耳にはよく通る声と通らない

声があります。声の周波数分析をすると、それぞれ低い周波数成分は同程度でしたが、通る声の人は高い周波数成分が特に3~4kHzで多くみられました。通らない声の人の声帯の周り（声門上腔）は狭く、喉頭蓋の前後の動きが大きくなっていました。」など、ご説明になっていました。

最後は音カメラに基づくお話で、「高い方の倍音が出ていると言葉の明瞭度、セリフや言葉のキレが良くなり、音色が豊かになります。共鳴をうまく息に乗せれば遠くまで届きます。共鳴を作るためには息の流れをどう使うか、呼吸が発声の原点になります。」と、動画を提示しながら、わかりやすくご講演されました。



錦江湾・桜島をバックに米山先生と筆者

私たちに、幅広い教養・知識、体験を授けて下さったのみならず、常にあたたかいお心遣いを下さった米山先生に改めて感謝申し上げます。

◇ 河合 孝夫 理事・河合孝夫音楽研究所所長

『「共鳴」の話』

声楽発声の必須条件である「共鳴した声」。皆様の練習やレッスンの何かお役に立てばと考え、「共鳴」を物理的にみるとどのような現象なのかをお話し致します。

物理的に言うと「共鳴」は、声帯振動で起きた空気の波動が一定の空間で合成波を作ることのできる現象で、そのためには安定した共鳴空間が必要になります。

「共鳴」の原理

声帯で起きた空気振動の波動は、「入射波」として喉頭腔～咽頭腔～鼻腔の空間に伝わり、鼻口で外の空気に反射し「反射波」として戻ってきます。この「反射波」と「入射波」が重なり、両方の波が止まった様になる現象の「定常波」ができた時、振幅が2倍の大きさの「合成波」となり共鳴という現象が生じます。

「鼻腔共鳴」の原理

声帯で起きた空気振動の波動は口腔と鼻腔に共鳴することが可能ですが、口腔は発音のため空間の形を頻繁に変えなければならず、音楽的共鳴空間には不向きです。一方鼻腔は変化がなく、喉頭腔～咽頭腔～鼻腔と繋げることで一定の長さのある安定した共鳴空間として声を共鳴させることができます。これが鼻腔共鳴の原理です。

「発音：口腔共鳴」

鼻腔共鳴をさせている時も口腔共鳴は母音発音の役割を果たしていますが、歌唱時の発音は会話時の発音と異なります。普通の会話発音では、母音を判別できるフォルマントに幅があるのに対して、優れた声楽家の発音はフォルマントを基音の整数倍にすることで声の響きを純化し、また基音の振動を補強することで音高をより明確にする働きをしています。

「共鳴」と「感覚」の例

喉頭腔～咽頭腔～鼻腔の空間で定常波ができ声が共鳴すると、「頭が響く」「眉間に声が集まる」「上顎で声が響く」といった現象が生まれます。このことを欧米では「マスク（仮面を付ける場所）に声が響く」と言い、声楽発声の必須条件になっています。また、プレイスメント（声の響く場所をつくる）という表現もします。

「優れた声楽家が歌うと、口の前に立てたロウソクの炎がゆれない」

合成波ができる時、空気移動が大きいと反射波が生じにくいので合成波が生まれず共鳴しません。つまり、息をいっぱい吐くのではなく、むしろ吐かない感覚が大切になります。これを発声時の吸気傾向の理論と言います。

物理的例として、リコーダーの低いドの音を出す時「息を吐きすぎると変な音になり、吐き過ぎない様にコントロールして吹くと上手に吹ける」ということがあり、吸気傾向の理論で声を共鳴させる時と感覚の共通点があります。

軟口蓋をあげる

軟口蓋の動きは、鼻腔を共鳴腔にするかしないかの分かれ道になります。物理的に軟口蓋を上げてしまうと鼻腔が遮断され、風邪や花粉症で鼻が詰まったのと同じ様になりとても歌える状態ではなくなります。声楽家の言う「軟口蓋をあげる」は物理的には「軟口蓋の力が抜け鼻腔に息の通う、鼻が良く通った状態の感覚」です。

感覚と科学

声楽家はとても繊細な感覚で歌を歌い、その感覚が人を感動させる歌となり、また発声技術を発展させます。しかし、感覚が繊細であればあるほど固有のものとなり他人との共有が難しくなります。一方科学は、論理性と普遍性を追求するので多くの人と共有することができますが、固有の感覚を証明できないこともあります。

本学会は、一見矛盾するこの二つを研究テーマとする会です。互いを尊重しながら歌唱と声の秘密を発見していきたいものです。

◇ 小森 輝彦 理事、声楽家、東京音楽大学教授

『音程と心理の関係』

音程の悪さを指摘された歌手の、声がよくなる事は無い。いささか奇妙な言い回しではありますが、経験上、理解して下さる方が多いのではないかと思います。言い方を変えると、「音程

の悪さを指摘された歌手の、音程がスムーズに良くなる事も無い」とも言えるのではないかと思います。

言うまでもなく、我々声楽家は、「声」と言うツールを扱うプロフェッショナルです。この「声」を使って音楽と言う芸術を行使し、コミュニケーションする。日々、たゆまぬ努力で声を訓練し続けています。

そのプロが、「声」を構成する要素として最も重要なエレメントの1つである「音程」の操作で、こういう問題が起こるのは不可避なのでしょうか。

僕は、ここに「心」の介在を、積極的に認めたいと思っています。「歌手のメンタル」と言う言葉が使われることがあります。これはどういう意味なのでしょう。

舞台の大小にかかわらず、声楽と言う、身一つで全てを表現しなければいけないこの崇高な営みで、多くの場合は楽譜を目の前に置くことも許されず、舞台の上で孤独に音と向き合い、目の前にいる聴衆の、いや、場合によっては横や背後にいる共演者の批判的な耳、視線にも耐えながら、力強く声を繰り出していかねばならない。時々「並の神経ではやってられない」と思うことがあります。そんなハードな行いにもかかわらず、多くの人がこの「歌う」と言う行為に魅せられてしまう、それもとても不思議なことですね。

話を音程に戻しましょう。音程については強い思い入れ、高いモラルをお持ちの方が多く、中にはその良し悪しを道徳や勤勉さ、当事者意識などと結びつけて語る方もいらっしゃる様に感じます。程度やケースは様々ですが、音程の悪さを指摘されたときに罪悪感のようなものを感じる歌手は少なくない。それが仕事の業績と直結するとなれば、危機感から心理的にはさらに追い詰められていきます。

われわれは歌うときに、甲状軟骨と披裂軟骨で声帯を引っ張っています。でも披裂軟骨が何

ミリ声帯を後に引っ張ったら音程が何度上がる、などと考えてはいません。ほとんどのことが無意識の中で行われます。ですので、こういった心理的な状況は結果に表れやすい。

この音程問題については、現実的なソリューションとしては、僕個人の事を言えば「音程の悪さは指摘しない」「声の問題を解決すると音程は結果的に改善する」と考えていますが、似たようなケースは声楽行為全般に分布していて、音程だけの問題に留まりません。

我々日本声楽発声学会は、音声学的な知識を深めて声を改善、発展させようと言う志を持つ方が集まっている組織だと思いますが、現実的には、音声学的な知識を得たからといって、すぐに音程が良くなるわけではありません。むしろ、科学的なアプローチを特段考えず、歌うという事に対して自然で無意識的な態度の歌手の方が音程が良かったりする。「不公平だ」と思った事もあります、その秘密に迫るにつれ、仕組みがわかって来たように思っています。

音声学的、科学的な視座、音楽的、芸術的なものを重んじる態度、これらに加え、我々が「人間」である事をもう一度考え直し、「心」の作用と声の発展、ひいては声の解放に向けて、研究、探求の道を歩んでいきたいと考えています。

◇ 森井 佳子 理事・国際関連コーディネーター・声楽家

『私と ICVT』

ICVT は 4 年に 1 度、世界中から声楽の指導者が集い、声楽（独唱、合唱）とジャズやポップス、音声学、音声生理学等についての講義やマスタークラス等が開催される大規模な国際学会で、会長は以前マスタークラスの講師として来日した Marvin Keenze 先生です。

2013 年 7 月のブリスベーン大会では基調講演者が Dr. Ingo Titze であること、Scott McCoy 教授

の講義があること、故 Richard Miller 先生の追想講演があるということで心待ちにしていました。

ところが日本からのツアーを企画し参加予定だった本学会顧問の山田実先生が参加できなくなったため、参加希望者が多い講義に通訳を振り分け、次の開催地を決める代表者会議に代理出席することが私の任務となりました。

幸い ICVT 参加経験豊富な望月和子先生を始めとする 9 名の同行者も一緒に、東京から山田先生がテレビ電話を通じて応援して下さいだったので何とか乗り切りました。

代表者会議では 7 月開催だと日本の会員の参加は難しく 8 月なら参加しやすい旨を伝えました。その発言の責任と、ICVT のプログラムが大変充実していたことから次回も参加する決意を固めました。

2017 年のストックホルム大会は日本から単独で参加しました。地元スウェーデン出身の Dr. Johan Sundberg の基調講演は満席で会場は熱気に包まれていました。また、先生は高名な研究者であるにも関わらず講演資料にふざけた写真を入れるなど茶目っ気に溢れた方でした。

そして David L. Jones 先生のマスタークラスでは、先生の指導によって魔法をかけられたように受講生の歌声が変わるという状況を前にして、指導者の責任の重さと指導技術を更新する重要性を痛感しました。

ICVT では世界各地からの参加者同士が交流できることも魅力の一つです。

私も席が隣り合った参加者や発表者や Keenze 先生、過去の開催地の会長、音楽雑誌の編集者の方々と歓談したり、連絡先を交換し合ったりしてきました。

コロナ禍で 1 年延期になりましたが、2022 年 8 月 3~6 日開催予定の次回ウィーン大会に向けて会員の皆様に周知徹底を図り参加者を増やすことが私の役割です。



ICVT2017 基調講演者 Dr. Johan Sundberg
("The Science of the Singing Voice"の著者)
と筆者

◇ 菅 英三子 理事、声楽家、東京藝術大学教授

『ささやかな日々』

父がプロテスタントの教会の牧師をしており、ましたので教会で生まれ育ちました私は、ただひたすらに歌うことが好きで、やがて声楽を学びたいと望むようになり、ドイツリートの大先輩でいらっしやいました佐々木成子先生のご指導を仰ぐため京都市立芸術大学に進学いたしました。佐々木成子先生からの「あなた、ヨーロッパに実際に行って、一度あちらの空気を吸っていらっしやい」というお言葉で一念発起し、けれども「留学」という言葉は頭に浮かびもせず、夏季講習に参加いたしました。二度目のヨーロッパに向かおうとしておりましたところが日本を出立する前日、父が急逝いたしました。

少し落ち着いてきました頃に母が夏の講習だけでも行ってきたらと言ってくれ、前年と同じウィーンの講習会の急遽参加することにいたしました。この講習会で教えていただいたのがウィーン国立音楽大学のロートラウト・ハンスマン教授で、先生の勧めで講習の後そのままウィーンに滞在しウィーン国立音楽大学の入試を受け、留学することになりました。

何もかもが本当に思いがけないことでしたが、

たくさんの方のご協力、ご支援をいただき、ウィーンでの生活が始まりました。

ウィーン国立音楽大学ではリート・オラトリオ科とオペラ科の両方に在籍し、大学のオペラ公演などにも出演いたしましたが、スメタナ歌劇場

(現プラハ国立歌劇場)でのデビューが決まり、授業の参加が難しくなり、リート・オラトリオ科の修了に絞りました。週日はプラハでモーツァルトの「後宮からの逃走」の稽古に参加し、週末はウィーンに戻り修了試験のレパトリーを仕上げていくという日々が続きました。

今振り返りましても、多分あの時が一番勉強したのではないかと思います。

日本でも、ウィーンでも、その後数年間のヨーロッパ生活の期間でも、厳しい耳で私の歌を聴いてくださり、最も良いところへ導いてくださる先生方がいらしてくださいましたことはかけがえのない宝です。

声楽全般においては佐々木成子先生、ハンスマン先生、リートのご指導をいただいたオルトナー先生、モーア先生、ヴェルバ先生、そして日本での演奏活動で長く共演していただいたライナー・ホフマン氏、皆様から本当に多くのことを教えていただきました。そして何より、先生方の音楽を愛する心、歌を愛する心、人として生きる根本である先生方のお心に触れさせていただいたことが大きな宝です。

そして日本の大学で指導させていただくようになりまして早くも20年が過ぎました。学生との日々は毎日が発見と学びの連続で、私自身を見つめ直し鍛え直す毎日です。学生一人一人の個性や感性を尊重しながら、それぞれが持つ身体や声に向き合い、一人一人が必要としているであろうことに耳を澄まし、目を注ぎ、心を傾けたいと願っております。

毎日の歩みは目に見えないほど小さく、それこそ薄紙一枚くらいのものでしょうか。でもその小さな一歩の積み重ねが、やがて大きな成長につながるかと信じています。

今世界は情報で溢れ、簡単に自己発信ができます。しかし本当に心から溢れる出る感動を伴う自己発信ができていないか、あまりにも安易に時間も心も消耗しているのではないかとその恐れを抱きます。このような現代であるからこそ、音楽をはじめ芸術が大切なのではないのでしょうか。

コロナ感染が拡大を続ける今、私たちの日常は小さな一歩を積み重ね、学生一人一人の最も良い成長を願いながら毎日を送っていきたくと願っております。



2017年お誕生日の佐々木成子先生と筆者

◇ 田中 昌司 理事・上智大学教授(音楽脳科学)・工学博士

『音楽と脳科学』

以前から唱えられていた「芸術と科学の融合」という大きな流れの中で、自分にできることは何かを考えてきました。私が通っているカトリック調布教会で「音楽と脳科学と信仰の接点」という講演をさせていただいたこともあります。その頃私は音大生の脳の研究を行っていました。

音楽脳研究は桐朋学園大学にメールを書くことから始まりました。自宅から近いので返信をいただいた30分後には大学を訪れていて、研究プランを説明したところ協力しましょうという返事をその場でいただきました。なんとという速さでしょう。こちら失速しないように、実験参加者のポスターを掲示していただくのと合わせて希

望者に実験内容の説明をするために通いました。

音楽家の皆さんには当たり前の光景だと思いますが、グランドピアノがある小さな教室で音大生に向かって話をするのはワクワクするものでした。実験が始まると、一人一人の桐朋生とたくさん、本当にたくさん話をしました。なぜこんなに興味を持ってくれるのだろうと驚きました。同時に、普段教えている上智大生もこうだといふのと思ったものです。

実験が順調に進むにつれて、音楽の被験者数を増やすために東京芸大の学生さん・卒業生、さらに他の音大の学生さんやプロの音楽家の方々にも参加していただくことができました。現在は音楽家の演奏脳波研究を主に行っています。

これまで多くの方の貴重なデータを解析させていただいて論文を書いてきました。それと同じくらい貴重だったのは参加者の方々とのお話です。皆さん脳のことにとっても関心があり、それはそれは多くの質問をいただきました。しかしその場でうまく説明できないこともたくさんあったので、いつか皆さんにわかりやすくお話ししたいという気持ちがつのっていきました。

そこでそれにお応えする気持ちで皆さん向けの入門書を書きました。『音大生・音楽家のための脳科学入門講義』という本です。この時期だからというわけではありませんが、出版社はコロナ社です。順調にいけば春に店頭で並ぶと思いますので、手に取っていただければ幸いです。



音楽脳研究に専念した思い出の市ヶ谷キャンパスの正門前で桐朋生のヴァイオリンを背負ってご機嫌の筆者

◇ 齊藤 祐 理事. 声楽家. 合唱指揮者.
鹿児島大学教授

『私の声楽・教員人生』

私は2021年3月末で、28年間勤務した国立鹿児島大学（教員養成学部）を定年退職する。

1993年に赴任して先ず、学生達が礼儀正しく不思議なほど暗く沈んだ様子で、特に4年生の表情が異様な暗さと沈んで見えたことに驚いた。その理由は、翌年1月頃に実感して納得させられることになる…。

私は「声楽個人レッスン」「合唱」他「学科対象の声楽講義」など半期間で14～15コマを担当し、教授会他多数の会議出席で「青息吐息」の時、学生達と話す機会があった。赴任時、学生達に抱いた印象について率直に尋ねると「どうせ無理だから」「努力しても無駄だから」という言葉に続き、「貼り出しがあるから」との言葉が返ってきた。

一方、音楽科教員6人の内4人が鹿児島出身や縁のある方々で、鹿児島の学生気質とその対処や指導法について一家言お持ちの方々が、「調子に乗らせてはいけない」「威厳が大事」「礼儀正しい学生こそいい演奏ができる」「学生は自分達の子供なのだ」等、私はことある毎に異口同音に諭された。そんな状況が続き、1月中旬に4年生の卒業実技試験を迎えた。6人の教員達は1人評点100点満点を条件に23人の演奏を聴き、採点するやすぐに集計作業に入る。

するとある古参の音楽教育教員が「今年も貼りだしだね。どうなるかな？」と弾んだ声をあげた。私は「貼り出し」とは何だろうと思った。

彼は模造紙に筆ペンで1番から順番に学生の氏名を書いて行く。とても達筆で書き手も満足げに見える。そして居合わせた皆に確認を取ると、模造紙を脇に早速廊下へ飛び出した。これが所謂「貼り出し」であった。彼は評価の低い学生を先頭に、順番に氏名を書いた模造紙を廊下の壁に誇らしげに貼りだし「卒業演奏会は上記の順番で行うこと。」と但し書きも記入した。

学生にしてみれば、4年生最後の評価を下級生達が往来する廊下に露わにされ、親や知人、友人も聴きに訪れる卒業演奏会が、成績の良くない順番に催されることによる屈辱感を抱かざるを得ない。

「そんな気持ちで演奏をしたいとは思わないでしょう」等と私が言うと、教員側は「学生を鍛えている」「競争させることに意義がある」「自分達も学生時代はそうされて強くなった」などと強弁し、学生との気持ちが乖離していることに気づいていない。

この時、私は学生達の異様な暗さと沈んだ瞳を持つ表情の理由をはっきりと理解した。

私は東京芸術大学声楽科で学んだ。それは将来声楽を専門とする仕事を希望したからだ。教育学部の学生の学びは、演奏自体は同じだが、音楽教育に求められる様々な楽器や演奏に触れることや体験を重ね試みるのが本来の目的である。

私が学生時代に故須永義雄先生のご講義『フースラーの発声学』で学んだ、歌うことで何度か表現を変化させながら出現する言葉「声の訓練に用いられる治療は、開放する（自由に解き放す）過程である」や「鍵を解いてあげること」は、まさに教育学部学生のためであると確信している。

グラーツ音大時代のヨゼフ・ロイブル先生からはフースラー理論から「アンザッツ」と「ドイツ語発音法」をご指導頂いた。畑中良輔先生には特に「日本語歌唱法」を、河合武彰先生には「歌唱に於ける良い声と身体の必要筋肉」について教えて頂いた。

これらの教えを中心に試行錯誤をくり返しながら、今日まで教育現場において声楽を指導することができた。

お3人の先生方に、心より感謝申し上げます。

なお、現在、鹿児島大学の卒業演奏会はその演奏順番を始め、すべての運営が学生に任されている。



1999年鹿児島市に於けるロイブル先生の公開レッスンにて、ロイブル先生と筆者

◇ 池田 京子 理事・長野支部長・声楽家。
信州大学教授・武蔵野音楽大学講師

『信州での声楽教育回顧』

ご縁あって信州大学に赴任してから早 25 年という月日が経とうとしております。長野冬季オリンピックが開催される前年度の事でした。着任した翌年からは音大の非常勤のお話をいただいておりますので、以来 20 数年間、毎週東京と長野を往復するのが日常です。新幹線で 90 分ほどですから、さほど苦にもならず、山桜が等高線状に登っていくように咲く姿や、紅葉が山頂から山麓へ、そして市街地へと降りてくる様子など、四季折々の車窓を眺めるのは心の癒しにもなっています。

総合大学の教育学部と音楽大学での声楽教育とでは、大きく違うでしょうと聞かれることがしばしばあります。確かに中高の音楽科教員や小学校教員を目指す学生と、声楽家を目指す学生とでは、入学時の志や力には違いがあるのかもしれませんが。義務教育の教員としては、たとえ自分が立派に歌えなくても、声の出る仕組みを理解し、無理のない正しい発声法を身に付け、子どもたちの歌声を聴き分ける耳を育てていかねばなりません。その基礎教育は、音大の専門教育の場でも大きな違いは無く、ちょっとした指導の視点が違うだけではないかと捉えています。

実際、専門性の高い教員を目指して、教育学部を卒業後に藝大の学部へ入り直す人、音大の大学院へ進学する人、コンクールに挑戦して入賞する人、教員として勤めながら卒業後も歌の勉強を続けている人たちは多勢います。音大を出てもそのまま歌を止めてしまう人たちがいることを思うと、違いは一人ひとりの「生き方」にあるだけなのではないかと感じています。

信州では門下の卒業生を対象に、定期的に歌の研究会を開催しています。結婚したお相手を紹介してくれる人、生まれた赤ちゃんを連れてくる人もいて、その子どもたちをお互いに世話をしながら学び続ける姿には、こちらも疲れが吹き飛ぶ思いで、心を動かされます。県下の小中学校での授業研究会や、学校合唱コンクールの場などで活躍する姿を目にするには、とても嬉しく頼もしく思われ、佳い 25 年間だったなあと感謝の気持ちでいっぱいです。この春、信州大学を退職いたします。



前列向かって右が木下牧子さん、左が筆者
(第 100 回記念例会打ち上げ会場にて)

さて、本学会の長野支部では昨秋、第 100 回例会を迎え、記念コンサートを開催いたしました。作曲家の木下牧子さんをゲストにお迎えし、ご講演と合唱曲へのご指導をお願いし、筆者も木下作品を歌わせていただきました。彼女とは大学の同窓生で、学年も一つ違いの友人ですが、今や「超」が付くほどの売れっ子作曲家ですから、少し緊張

する思いでお迎えしましたが、その優しいお人柄は変わることなく、ウィットと勢いに溢れていて、作品の背景や詩への理解、発語法についての細やかなご指導に、楽しい時間はあっという間に過ぎました。お陰さまで新型コロナウイルス感染症拡大の波が押し寄せる前でしたので、会場（長野県民文化会館中ホール）はほぼ満席。東京からも相談役の清水喜承先生にお越しいただき、盛況のうちに終えることができました。101 回例会については、残念ながら開催の目途は立っておりませんが、これからも学術的な研究発表にとどまらず、参加者の皆様と共に歌う活動や呼吸法、発声法、指導法の実践的研究、外部講師をお招きしてのコンサートなど、声楽に関する様々な活動を展開してまいりたいと考えております。

◇ 川上 勝功 会長.声楽家.合唱指揮者

『私の音楽歴を振り返って』

終戦の年の昭和 20 年 3 月、横浜から母の実家のあった千葉県安房郡南三原村（現在の南房総市和田町）に空襲を逃れて疎開し、そこで約 10 年間を過ごしました。

父はエンジニア（機械工）でミシンの修理販売等で大当たりをし、戦後の食糧難をしっかりと乗り切っていた様です。

小学校の合唱部では、トップソプラノを歌っていましたが、6 年生の春から夏にかけて変声期を迎え、秋頃にはバリトンの声になっていました。中学 1 年生の 2 学期には横浜の港中学校に転校し、音楽の先生に合唱部を創設していただきました。3 年生の時には、独唱で TBS のコンクールで全国 1 位、文部大臣奨励賞を受賞しました。この事で、エンジニアになる夢を断念して、声楽への道を目指すこととなりました。県立緑ヶ丘高校でも合唱に明け暮れる毎日でした。

しかし、高校 3 年生の頃から発声に支障をきたし始め、思う様に声が出せなくなり、耳鼻咽喉科では発声に問題があると言われました。芸大教授

の矢田部勁吉先生や渡辺高之助先生に師事しましたが、間違った指導で壊れてしまった喉（声）の回復には 3~4 年もの時間を要する事となってしまったのです。

加えて、私が高校 2 年（17 歳）頃から、母が、若年生アルツハイマーになり、私が母の全ての世話をする事となりました。声楽家としての道はスタートから不運な道程を辿ることとなってしまったのです。

しかし、スタートで喉を壊した経験は、現在の発声研究者としての道を歩む礎となりました。芸大卒業後、当時声楽の指導を受けていたチェコ出身のヤン・ポッパー先生から、発声の技術を学びたいのであれば、アメリカには素晴らしい先生が多数おられるとのお言葉に、一も二もなくアメリカ行きを選びました。母が亡くなった翌年 33 歳の時に南カリフォルニア大学に留学する事が出来ました。

そこで師事した先生が、ポッパー先生からご紹介いただいたポーランド出身のナタリー・リモニック先生でした。当時、先生は USC の教授の他、全米のオペラギルドの会長も勤められ、その世界では最も高い地位におられました。

オペラ研修所では、オペラのハイライトやリート、ディクシオン、シェイクスピアの朗読、それにパントマイムを交えた演技の指導、バレエ及びダンス等々、月曜から金曜まで充実した授業でした。その時一緒に学んだ同級生に後世界的なバリトン歌手となった、トーマス・ハンブソン氏がいきました。一廻り下の彼とは歌以外にも卓球や、ビーチバレー、水泳等楽しい時間を一緒に過ごし、今でも懐かしい思い出となっています。土・日は毎週ホームレッスンに通い、1 週間全て歌って過ごすと言う大変幸せな留学生活となりました。ブリテンのオペラ『アルバート・ヘリング』の公演にも牧師役で出演させていただきました。

リモニック先生から、事ある毎に、“日本から留学してくる声楽家は、ことごとく喉で歌っている。一体何故か？”と質問され、その頃の私には

うまく答える事が出来ませんでした。結果として、先生はどうしても日本に行ってみたくて仰り、都合3回も来日していただく事になりました。

最初は、日本大学芸術学部で公開レッスンをお願いし、次に「日本声楽発声学会」での特別講演で公開レッスンをして頂きました。更に1ヶ月程滞在して頂き、「横浜シティオペラ」の公演で、メノッティの『アマールと夜の訪問者』の指揮を仰ぎ、素晴らしいものとなりました。リモニック先生の真髓は、発声は、“It is easy !!” “It is simple!!” でした。

当時、芸大から2年間の招聘のお話がありましたが、100歳近いお母様のお世話で長期滞在はご無理となり、実現には至りませんでした。今思い返せば、芸大着任が実現していたら、今の日本の声楽界も、もっと良い方向に変わっていたのではとつくづく思うこの頃であります。

■2020年度沖縄支部活動報告 豊田喜代美(代表)

『会報』第一号の発刊(9月)

特集 先師に学ぶ教育の原理と本質

目次

- ・沖縄声楽発声研究会「会報」第一号の発刊にあたって 高 丈二
- ・歌手がかかりやすい音声障害について 喜友名 朝則 pp1-2
- ・歌う喜びを再び 知念 利津子 pp3-4
- ・恩師との思い出 武田 光史 pp4-6
- ・わたしの個人発声史 糸数 剛 pp6-7
- ・音楽におけるサッカーからの学び～研鑽と指導について～ 仲本 博貴 pp8-9
- ・マエストロはかく語りき[連載-I]～ラビージャ先生とスペイン歌曲のキーワード～ 服部 洋一 pp10-12
- ・「芸術」の必要性 山内 昌也 pp12-13
- ・私が受けた声楽の指導 豊田 喜代美 pp13-16

編集後記

学会通信第44号と本第45号の内容は、『全理事が自らの経験から会員の皆さまにお伝えしたいこと』とすることが理事会で決定され、お届けして参りました。通常の内容による「学会通信」発行が叶う学会活動再開の 때가早く来ますようお願いしております。2020年12月現在、新型コロナウイルス感染は大変に心配な状況です。

皆様、何とぞご自愛くださいますように…。

編集担当 豊田喜代美

日本声楽発声学会

会 長 川上 勝功

副会長 佐々木 正利

齊藤 祐 (兼事務局長)

理事 (五十音順)

池田 京子 河合 孝夫 小森 輝彦

三枝 英人 菅 英三子 鈴木 慎一朗

竹田 数章 田中 昌司 豊田 喜代美

西浦 美佐子 森井 佳子

日本声楽発声学会 事務局 担当：佐々木徹

〒154-0002 東京都世田谷区下馬 3-14-4

E-mail: info@jars-voice.org

Tel・Fax: 03-6804-0626

Web サイト <http://www.jars-voice.org/>

郵便振替口座 00170-0-119920

加入者名：日本声楽発声学会

日本声楽発声学会 学会通信第45号

2021年(令和3年)3月1日発行

発行者：日本声楽発声学会

編集者：豊田喜代美